
超次元ゲーム ネプテューヌ Side Generation

ME-GA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌ Side Generation

【Nコード】

N4730V

【作者名】

ME-GA

【あらすじ】

幼き頃の記憶を無くした少年、テラはある日、ある事件を境に世界を救うというネプテューヌ、コンパ、アイエフの三人と旅をすることになる。

各大陸で事件を解決し、イストワールを救うために『鍵の欠片』を集める旅の先でテラは自分が何者なのかを知ることになる。それは、絶望の記憶。

本編とは一切関係のない日常風景や一波乱の騒ぎ、引いては登場人物達の過去などサイド、IFストーリーを扱います。

本編と同じく、シリアスとギャグの温度差が激しいかもしれません。

EXTRA - HERO

『自分とは何か』

まだ、少年がそれを探し続けていた頃の物語。

少年は静かにむくれていた。

おおよそ、普段通りと呼べる日常風景。

子供達が駆け回り、老人達がベンチに腰掛け談笑し、若い男女達が闊歩し、老若男女が楽しむことの出来る広場。

そんな中で一際異彩を放つ少年が『居た』。

分類するとすれば若い男性だ。漆黒にも近い頭髪を風に任せてなびかせて、穏やかなブラウン色の瞳はこれでもかと言うほどに研ぎ澄まされて周囲を睨んでいる。いや、睨んでいるわけではなくただ単に目付きが悪いだけなのであるが、傍から見れば充分にガラの悪い少年であつただろう。服装も至って平凡、カジュアルな衣装に身を包み、何をするでもなくただ広場のベンチに腰を添えて己の周りを流れる贅沢な平穩に身を任せていた。

無論、彼にとって平穩というのは『退屈』とも呼べるべきもので、彼が最も危惧すべき、最も疎むべき存在であつたことは確実だ。

そうした退屈に嫌悪感を抱くように、大きく息を吸って盛大にそれを吐き出した。ようするに退屈な時間を過ごすことによりそんな自分にも周囲にも失望の念を抱いた『溜息』だった。

そうして数分の時が流れただろう。

唐突にベンチから腰を上げて広場の出口、または入り口とも呼べるわけではあるがともかく彼はそちらの方を見やった。数秒の後、軽快な音楽と共に毎日スケジュール通りに街を巡回するクレープ屋の車が広場の中央に停車した。

別段、不思議な話でもない。たまの休みに必ず執り行う日程の一つだ。

何を思うわけでもない、自然にそちらの屋台の方へと足を向ける。ポケットから財布を取り出し、残金等を確認して屋台の前に出来ている列に並ぶ。

数分後に順番が来ていつも通りのモノを注文して、また先程に鎮座していたベンチへと戻り、それを食する。

ぺろり、それを完食し、再び重い腰を上げて広場を後にする。

『なんて事はない、ただのつまらない休日だ』、

『テラ』は心の中で毒づいた。

テラが士官校に入学してはや2年が経過、途中に軍のお偉いさんに入隊しないかと話を持ちかけられたり、同級生はたまたは先輩にまで一目置かれる存在になったりと、ここ2年だけで随分と戦闘ににおける才覚を余すことなく発揮し続けてきたテラであったが、彼の心がそれに見合うだけの潤いを感じてきたかと言えば、その答えは断じてNOであった。

これまで、いくらモンスターといえど数多の命を葬ってきたテラにとってそれらの礼賛の言葉などただの騒音、己を死神と崇め、畏怖するだけの罵倒にも成り得る言葉達であったのだった。

士官校に入っただのは、ただ単に自分を拾い育ててくれた父を助けた
いと、一矢報いたいという思いだけのハズだった。それなのに、己
の力量を過大評価し、無理矢理に押し上げた周りの声がテラに武器
を握らせた。

いつしか、そんな日常はテラにとってつまらない人生となっていっ
た。命を奪うことだけが、己に出来る唯一のこと。それならば、た
だ草原を駆け回り、そしてただ生きていくだけの獣と何ら変わりは
しない。それだけではない、彼は既に

『生きる目標』

すらも、見失いかけていた。

少女はしずしずと歩いていた。

至って安穩とした平常とした空気。

荒れ事など無縁のように、穏やかな雰囲気放つ森林の中を通る街
道はあまり人気がないが、それでも心の癒しを求めて足を運ぶ者も
少なくない。

そんな中でほんの少し異彩を放つ少女が一人。

黒い軽快な服装に頭部には少しばかり大きめのバイザーが陽の光を
反射させている。ショート、とは言い難い少し長めの青髪を揺らし
て、大きな青い瞳を怪しげな程にキョロキョロと慌ただしく動かし
て外界に意識を向けている。何事もない、至って退屈とした雰囲気。
少女にとって退屈とは『平和』だ。己の動くこともなく、ただ人々
がその中で笑っていられる嬉々とした感情を抱けるというのはそれ

は良いことだ。

そんな平和の中に、己の身を委ねるように少女はスッと目を閉じて大きく息を吸った。平和な時間をいかに心を落ち着かせ、そしてこの後に活かすか、その『深呼吸』だ。

そうして数分が経過しただろう。

少女は再び決意を秘めたような瞳で少しかり顔を揺らし、いや領いた。

視線を来た方向とは逆、つまり進行方向に視線を向けて再び一步、足を踏み出す。

のではあるが。

ズシン！

という音と共に少女の目の前に巨大な体躯を持ったモンスターが現れる。

この街道、滅多なことではないがモンスターが出現することもある。しかし、それもごく最近のことで少女が油断していたと言えそうかもしれない。

思わず地面に尻をつく。しかし、モンスターは何もなかったかのようには右手に持った斧を少女めがけて振り下ろす。

ッッ！

反射的に目を閉じる。思わず死を覚悟しただろう、しかしいつまで経っても来ることのない衝撃を訝しんで恐る恐る瞳を開く。

目の前に、『まるで少女を庇うように』立ちはだかる少年が華奢な身体の何処にそんな力があるのかと問いたくなるように、たった二

本の小柄なナイフでモンスターの斧の一撃を防ぎきっていた。

少女は呆気にとられてしばらく硬直したまま少年を見る。しかし、

少年は暫くモンスターとの均衡を保ったまま、背後の少女に怒号を飛ばす。

「退け！」

「え、あ、うん！」

少女は指示通りに後方に離れて少年に合図を送る。

「離れました！」

「ッ！」

その瞬間に少年は右手に持っていたナイフをずらし、瞬間に左に飛び退く。

そのまま勢いよく斧がパラパラと破片を飛ばして地面に突き刺さる。モンスターは小首を傾げながら何度も何度も斧を引っっこ抜こうと引っ張っているがやはり勢いが強すぎたためか抜ける気配は一向にない。

少年はすぐに左手のナイフを腰のホルダーに仕舞い、代わりにその横にある銃を構えてモンスターに発砲する。爆撃弾がヒットしてモンスターの顔から濛々と黒煙が起こる。右手で負傷した顔を押さえ、てのたうち回るモンスターの額に少年は無情にもナイフを突き立てる。大きく呻き声を上げてモンスターは崩れ落ちる。ナイフを引き抜いて身体に付着した汚れを軽く払い、少年は少女に目もくれずに立ち去ろうとする。

しかし、

「あ、あの」

「あん？」

少年は少々面倒くさそうに、機嫌の悪そうな声を上げて振り返る。その声音に少女は一瞬ビクと身体を震わせるのだが、意を決して口を開く。

「あの……助けてくれてありがとう」

「……ああ」

微かに戸惑ったような顔つきになってから少年は納得したように声を発した。ハア、と大きめの溜息を吐いて『テラ』はポケットに手をつ突っ込んで何の感情のこもらない声で答えた。

「俺はお前を助けたワケじゃない。モンスターが見えたから討伐に来ただけだ」

少女はまたしても呆氣にとられたような表情を見せる。しかし、テラは特に何も気にした風もなく足早にその場を立ち去ろうとするも彼の肩に少女の手がおおよそ少女とは思えぬ力でギリギリと握られている。

「じゃあ……なに。私はアンタみたいな冷酷人間に命救われたってワケ……？」

怒りに震えた声で少女、『日本一』は引きつったような笑みを浮かべながらみるみる額に青筋を立てていく。

「冷酷たあ、随分な物言いだな……。ま、間違っちゃいねえけどよ」先程の戦闘で乱れた髪型を戻しながらテラはまるでその事を肯定するように答える。

「アンタを一瞬でもいい人間だと思った私がバカだったわ……！」

「良かったな、また一つオトナになれたじゃねえか」

嘲笑うようにテラはそう日本一に声を掛けて踵を帰す。

「ま、俺がお前の生き方に口出すつもりはねえがあんま人を信用しすぎて痛い目見ても知らねえぞ？」

「なっ　！？」

にやり、とテラはニヒルな笑いを浮かべてひらひらと日本一に顔も向けずに右手を振る。

その物言いが癪に障ったのか、ますます日本一は顔を真っ赤にして拳を握る。

「じゃあな、バカ正直のお嬢ちゃん」

その一言が、日本一の怒りを有頂天にまで持ち上げたのは言うまでもないだろう。

「何でついてくるワケ？」

テラは非常に面倒くさそうに背後にちょうど1mくらいの距離を保って後をついてくる日本一に業を煮やして問い掛ける。

「決まってるでしょ！？ アンタに復讐するためよっ！」

「復讐て……」

テラは「何だそりゃ」とばかりに眉間にシワを寄せてがっくりと肩を落とす。

よほど先程の言葉が癢に障ったらしく、ギャーギャーと叫んでみっともない。

「私は絶対にアンタを許さないわよ！ アンタの言葉を絶対に撤回させてやるから！」

「はいはい……頑張りな」

額を押さえて心にもない声援を送り、再びテラは進行方向を向く。ぶっちゃけて言った話、彼女はテラにとってはかなり鬱陶しい存在ではあったのだが、何となく面白そうだという思いの方が勝り、こうしてあしらうこともなく後ろを追わせているのが現状である。

日本一はしばらく鋭い視線でテラを睨んでいたのだが、不意に口を開く。

「アンタ……ずっとそんな生き方してきたの？」

「は？ どういう意味だよ」

テラは素っ頓狂な声を上げて振り向く。その声音があまりにも想像していたモノよりも軽かったために日本一の心が少し揺らいだ。

「だ、だから……その、人間不信って言うか……」

「……あー、まあ不信ってワケじゃないケドよ」

妙に神妙な面持ちの日本一を茶化す雰囲気ではないと本能的に悟ったテラは嘆息して首筋を搔いてそう答える。

「俺の生きてる場所ってのは常に命がけだからな、そうやすやすと他人に心を開いていいような場所じゃねえんだよ」

「……軍人？」

「士官校だけだな、似たようなモンか」
日本一は視線を下に向けて両手の指を組んだり離したりを繰り返している。彼女が何を思ったか、それはテラに分かるところではなかった。同情、かもしれない。
一際大きな吐息を漏らして前を向く。

ドン

「ん」
僅かに身体を揺らしてテラは正面に目を向ける。何もない、ならば自分の感じた衝撃は何だったのか。
訝しんでいると視線の下の方に何か妙なモノがちょこんと映っている。

下の方へ向いてみれば一人の少年、テラ達よりも少し年下だろう。まだ大きな瞳に動揺とも取れるような色を映したブラウンの瞳。これは寝癖なのかと見まがうほどにあちこちに跳ねた頭髪。

テラはキツイ目付きを更にきつくして少年を訝しむように見る。
するとどうだ。みるみる少年の大きなブラウンの瞳から大粒の涙が溢れていく。

「な……！ アンタ！」
「……ったく」

日本一は惨状を見てテラをキツイ声音で呼ぶ。面倒くさそうに頭を掻いて少年と目線を合わせて言葉を投げかける。

「おい泣くな、男だろ。ぶつかられて転んだくらいでピーピー喚くな」

「いやアンタ、全然逆効果だから」

日本一が背後で的確な突っ込みを炸裂させる。

「もう……！」

「ハア、ったくよお」

テラは溜息を吐いて、少年の小柄な身体を勢いよく持ち上げる。

「わ　な　！？」

少年は泣いている所為と、驚いている所為で上手く言葉を発せていない。しかし、そんな少年を余所にテラはわっしょいわっしょいとまるで御輿を担ぐように少年の身体を上下させる。まるで幼児をあやすように。

「どーだ、楽しいか？」

「う、えっ！　ちょ、あぶ、あぶな　！」

「だああ、アンタもう少し加減を　！」

＊

「どうよ、楽しかったか」

「んなわきやねーだろ！　すげー怖かったぞ！」

「見てるこつちまでハラハラしたわ……」

寧ろ少年よりも日本一の方が心労でダウンしそうであった。先程とは別の意味で喚く少年の軽い攻防をこれまた軽くあしらって自然と笑みを零す。

そんな彼の横顔を、日本一は淋しげな表情で見つめていた。

『そつ、か……。あんなこと言ってたけど、ホントは普通の人間と一緒になんだ……。ただ優しいだけの男の子、か……。』

少年と戯れる彼は、本当にただの一人の心優しい人間のように思えた。いくら心の周りに冷たい壁を張っていても、きっとその内では愛を欲している。

日本一にはそう思えた。

ひとしきり少年と戯れた後にテラは落ちていた買い物袋を発見した。

「ん、ああ……　買い物してたのか。中身は……　うわ、卵潰れてらあ」

「え、マジで」

少年が袋の中を覗き込むのでテラは中身が見えるように傾けた。

「うわあ」

「ダメになつてゐるモンが幾つかあるなあ……。しゃあねえ、買い直すか」

テラは財布を取り出して残金を数える。しかし、少年は慌てたように声を上げる。

「で、でも、悪いし！」

「何言つてんだ。そもそも俺の所為なんだから弁償くらいさせろつての」

コッソ、と少年の頭を軽く小突いてテラは傍らで立ちつくしている日本一に声を掛ける。

「おい」

「……」

「おい！」

「ふ、え！ な、何！？」

「話聞いてたか……？」

取り乱す日本一を訝しむような視線を向けてテラは発する。

「だから、俺はコイツの買い直しに付き合つけどお前はどつする？

まだ俺のことつけ回すか？」

「つ、つけ回すなんて失礼ね！？」

「いや、事実だろ……」

いい加減に真実を認めた方が良さげな気もするが、本人が違つというのなら違つことにしておこうと、テラは既にこのころからテラたる風格を備えていたかもしれない。

「い、言つておくけど、私はまだ目的は達成してないんだから！」

「……へいへい。んじゃ、行くか」

テラはにやけた面で日本一を一瞥すると買い物袋を引つ提げて二人を促した。

「兄ちゃん姉ちゃん、あながと！」

そうお礼を言う少年の頭をテラはまた小突く。

「だから、俺はお前に憎まれ口を叩かれても礼を言われる筋合いはねえっての」

少年が無邪気に笑うのにつられて、テラも自然と微笑を浮かべる。

少年は街中に掲げられている時計台に視線を向けて慌てたような声を上げる。

「うわ、もうこんな時間だ！」

「ん、門限か？」

「ううん、でも早く帰って飯の準備しないと」

「あれ、一人で作れるの？ 凄いわね」

この年にしては随分としつかりした子だと日本一は感心する。

「うん、姉ちゃんに教えて貰ったんだ。だから今日はここでさよならだね」

「そうかい、じゃあなガキンちょ」

テラは悪戯っぽく微笑んで少年にそう投げかける。「ガキンじゃねーよ！」と突っかかってくる少年と暫く戯れてテラと日本一は少年を見送る。

グイツ、と伸びをしてテラはチラと日本一を見る。

「俺達も帰るか」

「そ、そうね……って何で私がアンタと帰らなきゃいけないの!？」
「……そっぴやそっぴやだ」

テラが納得したように呟く。何故、こんな発言をしたのかはテラにも理解できなかったが溜息を吐いてテラは何処か寂しげな表情を日本一に向けた。

「じゃ、俺あ帰るわ。縁があつたらまた会おうぜ」

「ッ！」

そう言つてテラは踵を歸し、恐らく士官校の宿舎に向かうのだろう。悲しげな背中が夕日をバックに映し出されて日本一はとてつもない

不快な感情に駆られた。

心配、だろうか。それとも同情か？ そう言っただ感情が波のように押し寄せてくる。何故、これほどまでに彼のことが気に掛かったのか、それは日本一にも分からなかった。

「おおい」

突如として、テラの声が響く。

「な、何！」

日本一は慌て気味の声でその声に返答する。

テラは微笑を携えて静かに発言する。

「俺な、さっきはあんなこと言っただけどお前みたいなバカ正直な女は好きだぜ」

その瞬間に、日本一の心は完全に揺れ動いた。頬は夕日の光で分かれなかったが完全に顔全体を覆うのではないかと言うほどに朱が広がり、心臓の鼓動は早鐘のように鳴りつづいている。

「ッ！　なん、で……あんなヤツ……」

認めたくなかったのかもしれない。

いや、認めたかったからこそか。

日本一は怒号『のような』声を張り上げてテラに突きつけた。

「だから、バカ正直は余計よ　っ……」

日本一は紅い空の元にそう叫んだ。

テラは笑いを堪えるようにして肩を震わせてほっと一息吐いた後に、また薄く笑みを浮かべて右手をひらひらと彼女に向けて二、三度振った。

日本一も、少し戸惑った後に小さく手を振り返した。

＊

テラが見えなくなって数分の後。

我に返った日本一はまるで今までの感情を握りつぶすが如く、震える拳を握り直して夕日がまるで炎にでも見えるように決意に満ち満ちた表情となった。

『許さない……！ 絶対に私の生き方が正しいんだって証明してやる　！！』

すっかり日も暮れた広場の中央で日本一はそう心に強く刻んだ。ちなみに、これが（無駄に）延長して日本一がヒーローを目指すようになったというのは言うまでもない話だろう。

そして、この出会いが後に大きな衝撃を与えることになるのだが、それもまた別の話である。

EXTRA・HERO（後書き）

第一話はテラと日本一の話ですね。

若気の至りというかアレですね、テラが別キャラになっている気がします。

書いて良かったと思ってます。

EXTRA - BROKE , AND BROKE

重厚なる黒の大地、ラステイション。

依然としてその空には濛々とした黒雲が広がっており、それを見上げてしまつてはいつい安穩とした気持ちを抱いてしまふのでそれになるべく視界に入れないように歩んでいる人々も少なくなかつた。そうでなくとも本日は一段と天気も低迷しており、今にも一雨来そうな程に雨雲の広がる空であつた。

ここラステイションでは数年間に渡る『アヴニール』社の産業独占によつて多くの中小企業が倒産の危機に立たされていたが、この度を持つてアヴニール社の不正が公になりもれなくこの事件は解決した。かのように思われたが、倒産した会社が元に戻るわけもなく、解雇された人々の視線は暗く、またアヴニール社に務めていた人々すらも頭を抱えるものとなつてしまつていた。

しかしながらそんなことは大して気にした風もなく、灰空の下にある少女はやたらとテンションの高いものであつた。

「さー、今日もクエスト頑張っちゃおう!!」
ネプテューヌ、その人だつた。

とどのつまり、テンション高いのは特に何があるわけではなく通常通りであると言うことが見て取れる。

その隣で、特に何を思うわけでもなく日常茶飯事だというように少女：アイエフが掲示板に目を通してゐる。

「まあ、特に何がしたいわけでもないし簡単なクエストで済ませましょ?」

アイエフは目に付いた比較的、容易にこなせそうなクエスト用紙に手を伸ばすも身長足りないせいかギリギリのところでは用紙の端を

擦るのみであった。

見かねたコンパが微笑のまま、アイエフの取ろうとしていた用紙をぴらっと事も無げに取り、アイエフに手渡した。

そんなコンパの行為にアイエフはすごく悲しそうな顔をしてからクエストの詳細に目を通す。内容は付近のダンジョンのモンスターの一定数の討伐と、既に経験を積み込んだ彼女たちにとっては昼食前とそこに力を使えば終えることの出来るクエストだ。

それはさておき、

「あいちゃん？ さっきクエスト用紙に手え届かなかったねえ」
ニヤニヤとネプテューヌが『いかにもからかっていますよオーラ』を包み隠すことなく全力全開で放っていることに対してアイエフがビキッと額に青筋を浮かべる。拳を握ってネプテューヌに振り下ろそうとしたときに少年の声が掛かった。

「いやいや、ネプ子の方が身長低いのにそれは言えないわ」

半ば呆れた感じに少年：テラバ・アイトはお手洗いから帰還してきた。

今まで何とも言えずに苦笑を浮かべることしかできなかったコンパもここでテラの援護射撃を受けて何とか発言することが出来た。

「そうですね、ねぶねぶの方がきつと届かないです」

「ふっふーん、私は変身したら身長伸びるからこれくらい楽勝だよ？」

「こんなことでいちいち変身なんかするな……」

『こんなところで変身したってまた余計なトラブルを起こすだけだから』とテラは付け足してまるで何かに勝ち誇っているように胸に右手を当てているネプテューヌに嘆息混じりに諭した。

「むふふ、とか何とか言ってホントはテラさんは私のスタイルに見惚れちゃうんでしょ？」

といかにもニヤニヤとした口調でネプテューヌはテラの小脇を右肘で突く。

ぶっちゃけたところ、『変身後』のネプテューヌはそれなりにスタ

イルはいいし、言うところ特に『胸』が成長する。実際、ここまでで戦闘中に変身されてテラは思わずそっちに目が行っていたことは事実だし、気付いてはいないのだろうが的確に言い当てられてテラの心臓は早くも早鐘のようだ。

「そ、そんなんじゃないよ」

一応、口先だけでも否定の言葉を並べるが声が上ずっているのがテラ自身でもよく分かった。

そんなテラを納得のいかない風に見つめていたコンパとアイエフはぷうぷうと可愛らしく頬を膨らせてからキツと少しネプテューヌを睨んだ。

「そうは言っても、ネプ子は『変身後』にしか頼れないんだから素のまんまじゃ話にならないって事よね？」

アイエフがいかにも皮肉っぽく、ネプテューヌに嫌みたらしい笑みを浮かべて言った。

それに対してネプテューヌは「はう！？」とか言って今更気付いたという感じにショックを受けていた。

「そ、そんなことないもん！ テラさんはきつと普段の私も好きでいてくれるもんね！？」

「う、ええ！？」

いきなり話を振られてテラはネプテューヌと同じくらい驚いた。

「変身している間しか見て貰えてないって事でしょ？ その点で言えば私はそのまま勝負している分まだネプ子よりは需要があるわ！」

しかし、それに反論するべしとコンパはこれ見よがしにテラの右腕に自身のその豊満な果実を押しつけた。

「ね、ねぶねぶの変身した後の姿のスタイルなら私が一番いい勝負です！ テラさん、ですよね！？」

「え、あ、うーん……？」

テラはもうどうにもできないと言う風に言葉を濁した。

しかし恋する乙女達はその程度で止まるはずもなく、冷や汗を浮か

べるテラの顔にずいと三つの少女達の顔が近づけられる。

「……どう（ですか）！？」「……」

「え、えー……？」

『何で俺に聞くんだ……』と心の中で半泣きになっていたテラである。

もちろんそれは彼に恋する乙女だからであり、それに気付かないテラは当然のようにアレであるのだが。

つか、もう話についていけずにロクな言葉を発せていないのではあるが。

その後、『俺はみんなそれぞれにいいところがあるから上下はないと思うけど……』という歯の浮いた言葉に対して例の如くこの3人の少女達は『きゅん』とばかりに胸を打たれて（もちろん彼自身意識したわけではなく先天的なものであるのだが）すっかり惚けてしまっているところをテラが目的のダンジョンに連れてきたのであった。

「ほれ、着いたぞ」

テラは3人を振り返ってそう言うが、相変わらず3人の瞳はピンク色になって動く気配がない。

そんな状況にどうしようもない、と風に嘆息してテラは一人ずつ額を小突いて覚醒させていく。三者三様のリアクションを取るかと思われたが全員が小突かれた瞬間に「ハッ！」とか何ともテンプレな事をぬかして覚醒したのでテラは思わず苦笑した。

「あ、あれー？ さっきまで街にいたよねえ？」

「何でいきなりダンジョンに来てるんですかあ？」

「どうなってるのよ……？」

『ホントに何も聞いていないし、見てもなかったんだ……』とキラは既に苦笑していたが、もう表情を崩すことが出来ずにいた。強いて言うならば苦笑から笑いは抜けて非常に苦い表情に変わっていったとも言えるのだが。

「お前らがボーツとしている間に連れてきたんだよ。ほれ、さつさと行くぞー」

テラはこれ以上、油を売っていてもなんだと思ったのか結局、自分たちの置かれた状況をまったく理解できていない彼女たちの相手などする事もなく、ずんずんとダンジョンの中を突き進んでいく。そんな背後で三人の少女達は揃って小首を捻っていたわけではあるが。

数十分後、

ダンジョンの中を突き進むのは突き進むのであるが、例の如くネプテューヌが脱線に脱線しまくるのと、そもそもに目標であるモンスターが出現せずにこうして時間を持て余しているわけであった。

しかし、そうなると自然と彼らの気も緩むわけであって。

アイエフはおもむろに自分の懷から愛用のピンク色の携帯を取りだしてカチカチとそう差し始める。少し休憩、とばかりにテラはそこらの適当な岩に腰掛けて何を言うわけでもなくジッと彼女の様子を伺っていた。その視線に気付いたのか、アイエフが眉を寄せてテラに問い掛けた。

「何？ 何で見てるの？」

「ん、ああ……」

特に何を思っていたわけではないのだが、そう言われると何かを考えていたような気がする。テラは思うのだが暫く思考を廻らせてから思い出したようにアイエフの手元を指す。

「アイエフっていつも携帯いじってるよな？」

「まあね、携帯はいいわよ。まさに現代文化の象徴ね」

『そこまで言うか……』とテラは既に付いていけないオーラを發して苦笑していたが、どうやらエンジンが掛かったようでアイエフはいつになくキラキラとした瞳で熱く語り出した。

「携帯っていいわよ？ 電話メールはもちろんだし、最近じゃゲームも出来るようになってきたから今やただの連絡手段だけじゃなく、娯樂としての機能も備えているから……」

「あ、うん。そこらへんはよく分かる」

テラは青汁を一気にコップ一杯飲んだような苦い表情でアイエフの言葉を遮るように答えた。

テラとて現代人なので携帯は持っているのだが彼はその通り、この旅が始まるまでそんなに近い存在がいたわけでもないし、携帯を持ち出したのだからごくごく最近のことなので特に連絡を取り合うような人もいないのであまり持ち歩いてはいなかった。とどのつまり携帯の存在意義を確立していなかった。それに、大陸間で電波は届かないので旅を始める前に自宅に置いてきてしまっていた。

しかし、そこで流石は看護学生と言うべきかコンパが割って入る。

「でもでも、携帯って結構身体に悪いですよ？ あいちゃんのようにほぼ毎日使用しているなら尚更です」

テラはその意味は何となく分かった。

以前にテレビが何かで言っていたのであろうが、携帯の発する電波が確か身体、特に脳に影響するとか何とかを聞いた覚えがあった。ましてや、アイエフのようにヒマさえあればいじっているようでは尚のことだろうとテラは思う。

しかし、それに対してアイエフはむすつと頬を膨らませる。

「最近の携帯ってのはそういうところも考慮されてるんだから大丈夫よ」

「でも、アイエフのは大陸間でも使える特別製だろ？ 電波も凄いいんじゃないか？」

テラがそう言うときアイエフは視線を反らして黙り込んでしまった。どうやら凶星らしく、苦笑で返した。

しかし、そんなまったりとした会話の最中に生粋のトラブルメーカー：ネプテューヌはここでもやはりトラブルを引き連れてくるわけ。

「テラさん！　こんぱー！　あいちゃん！！」

見事に悲壮きつたような声でどこぞを探索していたのであろうネプテューヌが三人の元に駆け込んできた。

「……どした？」

ここまでの付き合いで、例え彼女がトラブルを起こしたところで慌てしまっても仕方がないと悟ったテラは取り乱すこともなく、というか半ば呆れた風にネプテューヌに問い掛けた。

「見てっ、見て、アレ！！」

ぐいぐいとやけに慌てた様子でテラの服の裾を掴んで彼方を指している。

いつもの彼女なら大概のトラブルでも楽しそうにしているものだが今回はかなりは少し様子が違うことに違和感を覚えたのかテラが怪訝な顔つきで彼女の指す方向を見やる。

ズシン……ズシン……、と嫌な予感しかしない足音と共に岩場の陰からのっそりと巨大なモンスターが現れる。

「……マジで？」

どう見ても自分たちのレベルと釣り合わないだろう的なオーラをテラが発していた。それに気付いたのかどうかは分からないが、モンスターはギロリとこちらに視線を向けてグルグル……と低く唸っていた。

「ッ　！」

モンスターが突進する。

テラはその一瞬の間を見逃さなかった。

テラの瞳が一気に真剣なものに変わり、傍らのネプテューヌを安全な場所へ突き飛ばしすぐさま次のステップに移動する。背後のコンパとアイエフを両脇に抱えて岩陰に飛びこんで銃に弾丸を装填、右前足と左後足に的確に銃弾を撃ち込んで動きを止める。岩壁を蹴っ

て跳躍、モンスターの脳天にナイフを突き立てた。

『グガアアアアア……』

苦しげな咆吼と共に、モンスターの身体は横に倒れていく。

テラは小さく吐息して額に浮かんだ汗を袖で拭う。それからキツと向かい側に尻もちをついているネプテューヌを一睨みしてからゆっくりと歩み寄り、右手を差し出した。

意図するところが分からなかったのか、ネプテューヌは少しばかりキョトンとした表情だったがすぐに納得したような顔つきになってテラの手を借りてゆっくりと腰を上げた。

「いや、助かったあ。ありがと、テラさん」

ネプテューヌはポンポンと尻部に付着した汚れやらを払ってにこやかに礼を言った。

しかし、それに対してもキツイ表情を崩すことなくテラは小さく溜息を漏らした。

「あのなあ……いい加減、こうやってトラブル起こすのはやめてくれ……」

額に手をやつてすっかり疲れ切った表情で力無くテラはネプテューヌに注意した。しかし、それに対してネプテューヌはむすっと頬を膨らませて講義する。

「む、今回は違うよ。普通にエンカウントしちゃっただけだもん」
両手を可愛らしく振ってブーブーと講義するネプテューヌを見て、テラはだいぶ吃驚したような表情になってから、申し訳なさそうに微笑んで彼女の頭を撫でた。

「そうか……疑って悪かったな」

「分かってくれればいいよー あ、お詫びにチューして」コンパとアイエフも大丈夫か？」 ケチ」

否定こそしないものの、どう見ても悪意のある言葉の遮り方にネプテューヌはまた頬を膨らませた。

そんなネプテューヌの言葉を見無視してテラは二人に歩み寄るが、そんな彼の視界の端に妙なモノが映った。

「……………」

何となく疑問に思っただけ近付いてみるとそれは先程までアイエフがいじっていたピンク色の携帯だ。

しかし

「あちゃ……壊れちゃってるなあ」

残念そうになんかそれを拾い上げてまじまじと見てみるが、液晶には無数の亀裂が走っているし、ボタンだって幾つか抜け落ちていた。

大破、とはいかず中破くらいはしている携帯を持ってテラは三人の元に戻る。

幸い、三人とも怪我はないらしく見たとおり元気そうであった。

そのことに小さくテラは安堵の息を漏らす。

「あれ？ 私の携帯は？」

だが、アイエフの方はキョロキョロと自分の周囲を見回して携帯を探っていた。テラは少し居心地の悪そうに頬を掻いてからアイエフに声を掛ける。

「あ、あのさ……アイエフ？」

「……………」

一瞬 たった一瞬、アイエフの瞳が潤んでいるような気がしてテラはポツと微かに頬が熱くなるのを感じた。

それから先程拾い上げた彼女の携帯を差し出してから一息吐いてから発言した。

「た、たぶん……さっき俺が抱えて跳んだときに落としてたんだな。モンスターに踏まれて壊れて……」

と、そこまで言ったところでテラは奇妙な音に眉を寄せた。

その音はどうも自分の目の前に少女から発せられている。いつもはきつく前を見据えていた鋭い双眸は段々と弛み、きつく結ばれていた唇からその音 声は発せられていた。

鋭い、しかし大きめのその瞳から一筋 雫が零れる。

「ッ」

嗚咽。

聞き覚えは、ある。いつでも。
かつてモンスターに子供を殺されてしまった母親がそれを漏らしていた。

かつて弟を殺された同クラスの男がそれを漏らしていた。

泣いている。

そう直感で感じる事が出来た。いや、そうでなくとも目の前を見れば彼女が泣いていることくらい一目瞭然ではあった。けれど、やはりいきなりのことなのか思考が追いつかない。周囲のことすらも感覚でしか捉えられない。それだけに、彼女の涙は衝撃的で、刺激的で、恐ろしかった。

「アイ、エフ　？」

何とか、何とかしたい。

そう思っていた。けれど、彼女の返答は彼の予想を大きく裏切るモノであった。

「う、ええ……」

まるで、幼子のような鳴き声。

両手で目元を押さえて次々と溢れる涙を拭い取る。いっさい、声を押しとどめると言うことをしない、何の抵抗を感じさせることもなく、ただ大声で泣き喚いていた。

「……！？」

おおよそ、今までシリアスに彼女の姿を見届けていたことが馬鹿馬鹿しく思えるほどに彼女のその姿はあまりに幼く、変わり果てたモノであった。

テラだけじゃない、コンパも、ネプテューヌどころか、彼女の変わりように驚いている。

それだけに彼女の姿は、あまりに突飛すぎる様子だったのだ。

「あ、あいちゃん！？」

「あいちゃん、どうしたんですか！？」

わたたと慌てながら、彼女に何事かと問う二人の姿を見て思わず吹き出しそうになったテラだったが、ここはそんな悠長に構えてい

られる雰囲気でもないのでそれをグツと堪えて自分もアイエフに向き直る。

「だ、大丈夫か？ 何があつたんだ？」

まるで幼子をあやすように、テラはそつと泣きじゃくる彼女の肩に手を添えて出来るだけ優しい口調で彼女に問い掛けた。

しかし次の瞬間に、アイエフはきゅつとテラの服の裾を掴んで彼の胸に顔を埋めてわんわんと大泣きし始めた。

いくらそんな状況でもないとして、やはり恋する乙女にはその状況はあまりに許せるべき事態ではないらしくネプテューヌとコンパの心情背景に雷が落ちてからグイグイと二人してアイエフを引っ剥がしに掛かった。

「ずるーい！ あいちゃんだけずるい！！」

「そうですね！ 私だって、私だって……！！」

しかし、そんな彼女たちの言い分を例の如く理解できていないテラが変な顔をした。

「やだやだぁ！ 離れたくないー！！」

「……！？」

今度は二人だけでなく、テラの心情背景にも稲妻が轟き落ちた。

それはまるで幼子が駄々をこねるように、ブンブンと右手を振り回してネプテューヌとコンパの手を引き離して、ギョツとテラの陰に出来るだけ隠れるように、より密着するように身体を寄せた。

「あ、あ、あ、アイエフ……さん？」

「ぐすつ……なあに……？」

テラとしてはここまでで既に事態を把握できるだけのキャパシティが残されていなかった。名前はテラなのに。

それどころかテラのあまりに動揺した問い掛けにも、何のツツコミも入れることなくアイエフは涙声でただ単純明快に返答した。

「何故に、こんなことに……？」

「……なんで……？」

なおも涙声でアイエフはテラの問いに再び問い返した。

その声もいつのもののような強く厳しいものではなく、子供が親に甘えるようなそんなにも頼りない口調だった。

「え、えーと……何？」

ようやく混乱から脱したネプテューヌが震える声で疑問を口にしたが、『そんなこと俺が聞きたいわ』とばかりにテラが視線を送った。「と、とりあえず……ここから離れるですう。またモンスターさんが襲ってきたら大変です」

コンパも混乱を脱したようで、もつともな意見を発言する。まだ少しばかり動揺をきたしていたテラだが、それもそうだと首肯してアイエフを背負ってひとまずダンジョンを後にすることとなった。

ラストেশヨンの街中、

とある携帯ショップの中でテラはいまだ小脇に隠れるアイエフに少し大変な思いをしつつも店主の中年男性と言葉を交わしていた。

「あー、こりゃあすっかりやつちまったなあ」

すっかりボロボロの携帯を見て、男性は思わずそんな事を漏らした。しかし、そんなことは一見してみれば分かることであり、寧ろ聞きたいのはそういうことではない。

「どう？ 直りそう？」

テラはカウンターに肘を突いて、緊急事態っぽそうな苦い表情で男性に尋ねる。

男性は『む……』と難しそうに唸ってから腕を組んだが、暫く携帯を見てから小さく首を横に振った。

「直るには直るだろうが……結構時間が掛かるし、これなら買い換

えた方がいいんじゃないか？」

「ふうん……だそうだけど、どうだ？」

テラは小脇のアイエフに視線を向けたが、彼女は言葉も発することもなくふるふると首を横に振るのみである。

テラは『そうか……』と嘆息して、何度もピンク色の携帯とアイエフを交互に見る。それからもう一度、吐息した。

「……おじさん、悪いけど修理の方で頼めるかな？」

「ん、まあ仕事だし、やることにはやるが……時間は結構要るぞ？」

「ええ……、まあコイツがそっちがいいって言うんで」

苦笑してテラは二、三度アイエフの頭を撫でる。アイエフはそれにくすぐったそうに片目を閉じてからまたテラの身体に自分の身体を寄せる。

『二、三日いると思うからそれまでしたらまた来てくれ』という男性の言葉を受けて、テラはアイエフを引き連れて携帯ショップの扉を押し開けた。

ショップの前で待機していたネプテューヌとコンパの二人が歩み寄る。

「どうだった？」

「修理で二、三日だったさ」

テラはふうと吐息して肩をすくめる。

『そっかー……』と、口調でこそそんなものであったがどこか心配そうな表情でネプテューヌは言った。

ワケが分らない。

テラは心中でそう吐き捨てた。別に苛立っているわけでもないし、どちらかと言えば限りなくどうしようもない事態に陥っているための混乱だろうか。とにかく早急になんとかしたい事態ではあるものの理由も解らなければ、解決策も見えてこない。
。 いったいどうして、こうなったのか。

「あいちゃん、いつたいどうしちゃったんですか？」

コンパができるだけ優しげな口調で、アイエフに視線を合わせるように腰を落としてそう問い掛けた。

しかし、当の本人はと言えば

「……何が……？」

と、やはり答えは予想通りというかそんな返答が帰ってくるのみだった。

どうやら、意識的にそうなっているようではなくあくまで無意識的なものであるということが立証されたがそんなもの糞食らえ、とばかりにテラはクシヤクシヤと後頭部を乱暴に搔いて小さく嘆息した。瞳を潤ませるアイエフの姿をチラリと視界の端に入れてから、よしよしと彼女の頭を撫でる。先程よりは嬉しそうに頬を染めてアイエフは身体をすり寄せた。

その様子が微笑ましいとは思えども、やはりこの姿は異常というかネプテューヌは苦い表情で小首を捻った。

「とりあえずどうにかしたいよねえ……」

ポンポンとアイエフの頭を軽く撫でて（とは言ってもネプテューヌの方が若干身長は低いのはあるが）そう呟いた。

「う、うーん……？」

しかしながら、テラとしては何とも言えないようなバツチコイ感が漂っていたのだが。思えば記憶はなくとも彼の妹とかそう言うのに対する感情は残っていたと言えるよう。

それにどことなく気付いたのだろっネプテューヌがぶくぶくと頬を膨らませて不機嫌な表情でテラを睨みつけていた。

「なに？ テラさんはこっちのあいちゃんの方がいいの？」

「そ、そういうことではないかな……？」

今までに感じたことのないネプテューヌ（通常形態）から発せられるオーラに気圧されながらテラは濁し気味に言葉を発した。

だがまあ彼女の言う通り、このままではまずいと思う。恐らくこの状態、彼女の意識やいわゆる精神年齢というモノが著しく低下

してしまっている傾向にあるのだろう。こんな彼女を連れてクエストはおるか、外出どころか難しいような気さえしてくる。

「でも、あいちゃんホントにどうしちゃったんですか？」

「む……」

テラはコンパの言葉に腕を組んで思考を廻らせる。

彼女がこんな状態になってしまったのはほんの数時間前。ダンジョンでモンスターを撃破した直後には既にこんな感じであった。普通に考えれば怪我などのショックで精神不安定になってしまったとかならまだ、まだ考えられる事態ではあるがこの少女がそうなるとは考えにくい。だとすれば、あのモンスターが特殊な電波を発しており、彼女の脳に異常を来したか。と、そこまで思考したところでテラははたと気付く。

電波、電波、電波。

何かが引つかかる。

いつもの彼女ではない。そう『いつもの』アイエフではないのだ。

何か、どこか足りない部分が存在する。どこか。

「携帯……？」

いや、そんなまさか。

そう一瞬だけテラは否定した。しかし否定できるだけの材料が見当たらないのだ。

携帯を持っている彼女と持っていない彼女では明らかに何かが違う。何もかもが違う。

「いや、まさかそんな……」

そうは言うものの、既に決定事項な感じもした。

もう一度、テラはアイエフに視線を向けた。涙こそないものの明らかに不安そうな表情でテラの顔を覗き込んでいる。

やや大きめの溜息を吐いて、テラは全てを悟った気がした。そつと呆れたように額に手をやってもう一度、盛大な溜息を漏らした。

「コイツには携帯が精神維持のアイテムってワケか……」

「「どゆこと（ですか）？」」

分らない、と言う風にネプテューヌとアイエフは（・ ・）みたいな顔で頭上に？マークをびっしりと浮かべていた。

「アイエフの今まで性格はコイツの手元に携帯があつてこそ、保てる精神だつて事」

「要するに？」

まだ分かんないのか……と嘆息してからできるだけ脳内で簡潔な答えを導き出す。

「要はコイツは携帯がないとこんなになるってこと」

と言つて脇のアイエフを指す。

流石に納得できたようでネプテューヌは「なるほどー」とか言つていた。

しかし彼女たちが納得したところで事態が好転するはずもなく、テラはこの避難止めかも分からない溜息をもう一度吐いた。

夕食をファミレスで済ませ（アイエフはお子様ランチを注文したが、その場の全員が何となく納得した）、無事に宿へと帰宅する。

流石に年頃の少女少女が同じ部屋はないなとテラは一人で自分の部屋に向かおうとするもなかなかアイエフが自分の服の裾を離してくれないということで悪戦苦闘していた。

いや、それどころか自分が離そうとするのと相高まつて彼女もより一層服を握る力を強めている、気がする。

「……」

「……」

一見すると仲のよい、いや『非常に仲のよい』兄妹のようにも見えるがテラとしては気が気ではなかった。

しばらくドアの前でそんな攻防が続いたが、テラはニヤリと笑つて

いきなりジャケットを脱ぎ、Ｔシャツ姿になった。非常に安易な作戦ではあるが、精神年齢の低いアイエフ相手には十分な効果に思われたが、いつのまにかジャケットを握ったまま、テラのＴシャツにもしがみついていた。

「……！」

「……」

テラは流石に躊躇した。

いくらなんでもここでＴシャツは脱げなかった。そんなところを他人に目撃されれば、最悪テラは警察にパクられるであろう。数分、睨み合い（というか、ただ単に視線を交わしているだけだが）が続き、テラはハアと小さく吐息して肩を落とした。

「分かったよ……」

「……ッ」

嬉しそうにアイエフが頬を染めるのが分かる。

『こんな表情もするんだな』とテラは慈愛に満ちた表情で彼女の頭を数回撫でる。

「悪いネプ子、コンパ。少しアイエフ借りるぞ」

「……ふうん」

「……そうですか」

冷たい返答でテラは背筋に悪寒が走った。

『なんか悪い事したのかなー……』と少し悲しい気持ちになりつつ、テラは自分の部屋のドアを押し開けた。

テラはジャケットをハンガーに掛けて、ベッドに腰を下ろす。

どうしたものかと思いつつもとりあえずリモコンを探してテレビに電源を入れる。

特に見たい番組があったわけでもないが暇つぶし程度にはなるだろうかとお笑い番組にチャンネルをＦＩＸして適当に眺める。

アイエフもととつと小走りで歩み寄ってテラの横に腰掛ける。

まるで小動物のように嬉しそうに身体をすり寄せてくるアイエフを見て、テラはふと邪念が思い浮かんだが、それを振り払うように首を振った。

「あ、そういえば」

と、テラは思い出したように壁に掛けたジャケットのポケットから一つの買い物袋を取り出す、そしてすぐにアイエフの元に戻り、それを手渡す。

「……？」

ワケの分らない、と言った風に小首を傾げるアイエフにテラは微笑で答えた。

「菓子だよ。食いたいなら食べ」

「……！」

パアッ、と表情が明るくなるのが伺えた。

ガサガサとビニール特有の音を鳴らしてアイエフが一本の棒付きキヤンデイの包装を破ってもごもごと口にくわえる。

しかし、それを暫く見つめていたテラは失敗したような、何とも苦い表情をしていた。

いくら精神年齢が子供とはいえ、甘やかしすぎではないだろうかと思ひ直す。

アイエフとて立派な大人……とは言えずも決して子供でもない。こうやってお菓子を与えていてもいいものだろうか。とテラは思考した。

「……」

しかし、満足そうにキヤンデイを頬張るアイエフの姿を見てそんなことはどうでもいいとテラは彼女の脇に座り直してそんな事を思った。

*

「……！」

「……！」

今、テラの部屋では世にも奇妙な、無言の小競り合いが繰り広げられていた。

ネプテューヌが必死にアイエフのコートの裾を掴み、アイエフは半ば涙目でテラのＴシャツにしがみついている。

その間、テラは苦笑しきつきりだった。

「あいちゃ、ん……そろそろ寝る時間、だよ……！」

言葉が途切れ途切れなのはそれだけ力を込めている証拠なのだろうか、ネプテューヌは額にうつすらと汗を浮かべながらもアイエフのコートを引っ張っている。

なんだかんだ言っすつかり深夜零時。特に何があるわけでもないが、明日に備えてそろそろ寝なければならぬ時間だった。

しかし、そんなことはどうでもいいと言う風にアイエフは必死にテラのＴシャツにしがみついているままだった。

テラは心中で『Ｔシャツ伸びる……』などと悲しい思いを抱いていたが、発言したところでネプテューヌに『そんなことはどうでもいいの……！』とか怒鳴られること請け合いだったので黙して突っ立っていた。

「やだもん！ 今日ばテラと寝るんだもん……！」

『いつそんな約束したんだろう……』とかテラは思っていた。ていうか言ったらアイエフに『寝るもん！』と有無を言わさず首を縦に振らされた。押しに弱いテラである。

というかそろそろテラは『誰？』とか思い始めていた。明らかに別人である。

しかしやはりここでテラのお人好しというかそれが発動したので、テラはできるだけ宥める調子でネプテューヌに言った。

「あ、アイエフもこう言ってるし……今日は仕方ないんじゃないか？」

「む……犯罪だよ？ いいの、それでも」

「ぐ……ま、まあアイエフも今はこんなだけどいい大人だし、大丈夫じゃね？」

その物言いは明らかに何かを起こすつもりだと思っただが、案の定ネプテューヌにも突っ込まれた。

「そんな言っつて事は……テラさんはあいちゃん狙いだっただね！？ うわーん、テラさんの馬鹿　ッ！！」

「げふ……ッ！」

などと理不尽な怒りをぶつけられてテラは壁に激突した。しかも見事に鳩尾にヒットしていた。死ぬ。

ダメージの抜けきらない腹を押さえてテラはゆっくりと立ち上がった。

『聞いてよ、コンパ　ッ！』

『どうしたんですか？　ねぶねぶ？』

『テラさんが……、テラさんがあ……』

『テラさんがどうかしたんですか？』

『ぐすつ……テラさんがあいちゃんと間違いを起こすって……』

『……！　……分かったです、明日しっかりと注意しないとですねえ、注意するです……こっぴどく……』

壁を隔てて聞こえてくる会話にテラは『怒られるのか……』といやに悲しそうな顔をした。特別彼が悪いと言っことでもないが。

と、それと同時に『今じゃなくて明日なのか……』と思い、コンパの方も相当混乱しているんだということが受け取れた。少なくとも間違いを起こすつもりはないのだが。

「……」

邪魔をするネプテューヌがいなくなつて嬉しいのかアイエフはにこやか笑顔でベッドに入り、自分の横をぺしと叩いていた。

どうやら一緒に寝ろ、ということらしいがそんなことをしては確実に誤解される、しかも弁明の余地無しだと言っことが目に見えて分かるので、テラは遠慮した。

「いや、アイエフはベッド使うといいよ。俺はソファでいいからさ」と言っただが、そこでアイエフがショボーンとなつてしまったのでテラはぐつと言葉を詰まらせた。

＊

ちゅんちゅん、と小鳥のさえずる音と共にテラは目を覚ます。

カーテンの隙間から零れる朝日が、まだしょぼくれた視覚を刺激する。思わず目を細めてテラはそれを防ぐように身体ごと顔を横に向けた。

その瞬間にふわっと香る甘い匂い。テラは思わず瞬きをしてから吐息した。

「すう……すう……」

そうだった、と額を押さえる。

結局、昨夜は自分が折れてアイエフと共に眠っていたのであることを思い出す。

「ん、むー……」

もぞもぞと身体を揺り動かしてからころんと寝返りを打ち、テラに身体をすり寄せる。

着崩れた衣服の隙間から、チラチラと白い肌が見えてテラの動悸は激しさを増す。

「ッ
ッ」

思わず唾を飲む。

アイエフってこんなに可愛かったっけ……？

テラはそう思考を廻らせた。いや、もう熱く沸騰しそうな脳でそんなことを考えることは不可能だった。

あと、数センチ……唇まで僅か数センチだ。テラの理性がそこまで持つかと言えば、それは迷わずNOと答えられる。

テラの吐息は激しくなる。そつと、そつと顔を近づけて。

何もかもが震えていることが、よく分かった。けれど、今更どうにもできない。

アイエフの吐息が鼻にかかる。それだけでテラの頭はもう爆発しそなくらいに激しく揺さぶられていた。

あと、あと少し。

バンッ！！

けたたましい音と共に、扉が開け放たれた。

「ッ！」

テラの身体は一瞬、激しく震えた。

唇に当たった感触にも気付かず、咄嗟に身を引いたが時既に遅し。コンパ、彼女は彼女だ。しかし、到底見知った彼女の表情ではなく、あまりにも恐ろしく背筋の凍るような冷たい形相だった。

「こん、ぱ……さん？」

「オハヨウゴザイマスデス……」

まるで地獄の底からでも聞こえてくるんじゃないかと言うほどに、彼女のモノとは思えない声音で、間違いなく扉の元にいる彼女は発していた。

その背後、恐らく無理矢理にでも連れ出されたのだろうネプテューヌは身体を小刻みに震わせて涙目であった。

「ナニヲシテイタンデスカ……？」

「や……それは……」

「モウイチドイマス。ナニヲシテイタンデスカ……？」

いつのまにか、コンパの顔はすぐそこまで迫っていた。

テラの顔には大粒の汗がたつぷりと浮かんでいた。

「その……あの……いつ、一緒に……寝て……」

「ヘエ……ソウデスカ……」

「あの、……なんか、すみません……」

「フッフ……イインデスヨ、エエ、イイデストモ……」

「あのっ、俺……何か悪いこと……しましたか……？」

「……ソウデスネエ……」
何か壊れてきた、とテラは泣きそうな感じで思った。
その後、宿に断末魔が響いたのも事実である。

三日後。

無事、アイエフの元に携帯が帰還してきた。

「はあ……直ってよかったわあ」

アイエフは口調こそいつも通りであったが、携帯に頼擦りしていたそんな彼女の様子を微笑ましい様子でネプテューヌとコンパの『二人』は見つめていた。

その横でテラは暗く鬱屈とした表情で視線を送っていた。

色々気になることはあったのだが、一番気になってしかも怖いのでアイエフはとりあえず彼に何事かを問い掛けた。

「テラ、どうかしたの？　なんか怖いんだけど……」

「……ああ」

ポン、とテラはアイエフの両肩に手を置いて、妙に悲壮きった声で言った。

「戻ってきてくれてありがとう……」

「……はあ？」

ワケの分らない、と言った風に眉を寄せたアイエフが何があったのかと何度聞いてもそう答えるのみのテラに気味が悪くなって隣のコンパに問おうとしたが何か凄い怖いオーラを発していたために聞くのが怖くなってこの件については深く言及するのをやめた。

その後、プラネテューヌに帰還したテラはとりあえずアイエフが寝ている間に彼女の携帯を持ってギルド専用の携帯ショップに駆け込み、絶対に壊れないように細工を施して欲しいと懇願してアイエフの携帯は特別仕様になった。

後日、それを使用していたアイエフはどこか違和感を感じたが別に困るようなことでもないものでそれはスルーした。

〃後日〃

「イストワール……」

「はい？　なんでしょう」

テラは神妙な面持ちでイストワールに声を掛けた。

ただことでないテラの雰囲気気付いたのか、イストワールも真剣な表情で彼の言葉を聞く。

「アイエフの性格を一部でいいから矯正してくれないか……」

「……はい？」

イストワールは変な顔をした。

EXTRA - BROKE , AND BROKE (後書き)

時期的にはアヴニールの事件が解決した直後くらいです。

mk2より、携帯が壊れて幼児退行しちゃうアイエフちゃんの話が書きたかったので書きました。

理由は単純、可愛かったからです。もうずっとあのままでいいんじゃないかな「ソウルスコンビネーション!!」ギャース!! (死

SPECIAL・ELECTION

守護女神戦争……。

それは悲しき争い。

しかし、ゲームギョウ界にはまた別の戦争が存在していた。

そう。

「第1回！」

テラはいつにない満面の笑みでマイクを持っていない左手を掲げる。

「ゲームギョウ界大選挙っ！！」

キラもそれに合わせるように左手を掲げてそう宣言した。

始まります。

*

「いやー、遂に始まりましたねえ。ゲームギョウ界大選挙」

テラはまるでタリ被れで微笑を携えつつ、横に座っているキラに視線を送る。

「そうですね。まあ、俺らはオリキャラなので当然除外になりますが誰が一位になるのか楽しみですな」

キラは引きつり笑いを浮かべつつ自信の感想を述べる。

「まあ、尺も押してますしとつとに行きましょうか」

「何するんですか？」

「とりあえず参加メンバーの軽い自己紹介でもしますか」

テラは手元の資料をパラパラと捲る。

「えー、公式サイト順番通りに挙げますか」

テラは一枚の資料を探り当てる。

「えっと、まずはネプギアさんですね。カモン！」

「なんでDJ風なんですか？」

キラの疑問はスルーだ。

「えっと、こんにちは。プラネテューヌの女神候補生のネプギアです。今回はこんな素晴らしいイベントに呼んだ「えー、見ての通りネプギアさんは非常に優等生で極めて堅苦しいです」……スイマセン」

ネプギアは早くもショボーン状態だ。

見かねたキラが声を掛ける。

「だ、大丈夫。ネプギアの挨拶は堅苦しくないよ。この人、ちょっと面倒くさがりだから……」

「あと俺が選挙に出られないっていう嫉妬もある」

「そこは隠せよ！」

「だって俺の方が絶対頑張ってるのにそんなこむs「はいはい、これ以上読者の人達を敵に回さないようにー!!」」

キラは全力でテラの言葉を塞いだ。既に手遅れ感満載な気もするがキラに合図されてネプギアはもう一度一步前に出た。

「え、えっと……是非私に清き一票を！……これでいいのかな？」

「あとは……笑えば、いいと思うよ」

キラがまるで自分を護ってくれた少女に対するような微笑で返した。

「清い一票かどうかは微妙だけど……」

「おい！」

キラは全力で突っ込んだ。

「ネプギア退場」

「つーか、アナタそういうキャラじゃなかったでしょ」

「久々の登場だと思ったらこんなテンションになっちまってなあ。なんならもつと違うキャラにしてやるうか？」

テラはふつと笑ってキラに視線を送った。

「例えば？」

まったくもって嫌な予感しかしなかったがキラはとりあえず聞いてみた。

「はあーい　鬼神ことグレイハートだぞっ

好きなモノは絶望、

嫌いなモノは女の子の涙でえす」

「きしょっ」

「俺もきしょいと思う」

テラはテーブルに足を投げて自分で青ざめた。

「まあ、どんどん行くか」

「へいへい。じゃあ次、ユニどうぞー」

キラの合図でカーテンが開いてユニが現れる。

「ラストেশヨンの女神候補生、ユニよ！」

「おー、ギアと違って実に簡潔だな。短っ」

「おい、後半に本音出てるぞ。それはさておき、ユニはもう見たまんまツンデレですね」

「それロクな説明になってなくない？」

ユニはキラをジト目で睨む。

「むー、もつと深いんだろっけど作者の表現力がないからこんくらいにしかなくて……」

「それはそれで嬉しくないわね……」

「ま、何にせよ作者の押しメンであることは確実だから自信持てや」

「それもそれで嬉しくないわ」

どっちかっていうとこっちの方がハッキリ言っている。

「じゃあ最後の決め台詞をお願いします」

「分かったわよ。……べ、別にあんた達の票なんていらん」はい、
ありがとうございましたー」最後まで言わせるーっ!!」

＼ユニ（強制）退場＼

「じゃ、次行きますか」

「待て待て待て」

キラは全力で止めに入った。

さつきから全力なのですでに疲れ気味だ。

「なんだ？」

「違和感に気付け」

「ども、作者のME・GAです」

「知らん」ゲシッ（足蹴にする音）

「げふっ」

「なんで乱入してんだ」

「いや、次のゲストがゲストなので……」

「還れ」

「どこに!？」

「土」

「ギャア!」ブシッ!（流血）

「えー、とんだ邪魔が入りましたが気にせず行こうか。次、ラム＆
ロムのお二人です」

「お笑い芸人か」

「黙れ」

キラのテラに対する態度がぞんざいになってきた。

「やつほー! ルウィーが誇る双子女神ラムちゃん」公式サイト風
挨拶乙」……ヒドイー!」

「なあ、せめてゲストにちゃんと挨拶くらいはさせてやれ……」

なんだかんだでこの3人は挨拶をまともにできていない。

「えと、じゃあ続いてロム……」

視線を向けるとロムの姿は遙か彼方にスタジオに設置されている力ーテンから覗き込む感じになってた。

「おーい、挨拶だぞー」

「怖い……（ビクビク）」

「早く来い」

テラはいつになく非情だ。

「小さい子なんだから優しくしたれよ。怖くねえからおいでー」
扱いが乳児レベルだ。

ともあれキラの声でとてとととロムは戻ってきた。

「ろ、ロム……です。よろs「はいはいヨロシクヨロシク」……怖
い（ビクビク）」

「いい加減にしるよお前……」

遂に呼び方が『お前』になった。

「つーかこの調子で全員紹介していけるのか？」

「行けんじゃね？」

「お前がいる限りムリだと思う。とりあえず締めめの挨拶するか」

「絶対私に入れてよね！ それかロムちゃんかお姉ちゃん！」

「よろしく……」

（ラム&ロム退場）

「この調子でやっていったら終わったときにお前の人気だだ下がっ
てんじゃねえの？」

「元より人気なんてねえだろ」

テラは面倒くさそうに答えた。

「そもそもまだお前と絡んでもねえキャラを登場させる時点でどう
かと思う」

「それは俺も思うわ」

スイマセン。

「いや、地の文で普通に喋ってんじゃねえよ」
そうですね。

「おい、人の話聞けや」

第一、まだ結果も決まっていなことを議論するのもどうかと思うんですよ。

「うん、もういいわ。続けて」

なのでこっちで独自に選挙しようかなって思うんですよ。

「そーかい。いったい幾つ票が入る事やら」

まあ、ぶつちやけ暇つぶしの企画ですから。

「言っちゃったよ！ 暇つぶしって言っちゃった！！」

つーわけでその名も『オリジェネ大選挙！』開始宣言！
詳細は以下。

投票期間

9月3日～9月29日

「公式と同じか」

まあ、そうじゃないと覚えられないんで。
「ダメじゃねーか」

く対象キャラく

テラ

ネプテューヌ

ノ
ワ
ー
ル

ベ
ー
ル

ブ
ラ
ン

キ
ラ

ネ
プ
ギ
ア

ユ
ニ

ラ
ム

ロ
ム

アイ
エ
フ

コ
ン
パ

日
本
一

が
す
と

5
p
b
.

ケ
イ
ブ

フ
ァ
ル
コ
ム

R E D

イストワール

神宮寺ケイ

箱崎チカ

西沢ミナ

マジエコノヌ

マジック・ザ・ハード

ジャッジ・ザ・ハード

トリック・ザ・ハード

ブレイブ・ザ・ハード

下っ端

ワレチュー

以上。

投票は感想で送ってください。
「それをランキング形式で発表していきます」

投票数が少なければやりません。
「ハッキリ言っ たな、オイ」

では、たくさんの投票お待ちしています。

SPECIAL・ELECTION（後書き）

グダグダ回ですね、分かります。

投票お待ちしております。

EXTRA - SONG

『自分とは何か』

まだ、少年がそれを探し続けていた頃の物語　。

少女が、いた。

その少女は道ばたに蹲って、両手で頭を抱えるようにして小さく嗚咽を漏らしていた。

靡く綺麗な青髪をツインテールに結び上げて、大きな瞳は閉じられその端から涙を零していた。

そして、それを取り囲むようにして立ちはだかる数人の少年。

そんな中の一人が、拳を握って少女の頭に振り下ろした。割と力を込めて。

「ッ　！」

少女はそれを脳天に受けて、それでも声にならない悲鳴を上げた。傍から見れば、ただの子供達の戯れに見えた。

しかし、実情としては紛れもない『弱いものイジメ』の光景である。

「むかつくんだよ！」

「いつつもビクビクしやがって」

少年達は口々にそう浴びせかけた。

けれど、それすらも拒絶するように少女はただ目を深く瞑っている。また一つ、拳が少女の頭に吸い込まれるようにして叩き込まれた。

「痛いよう……」

「あん？　聞こえねーよ」

今度は脇腹に蹴りが入る。少女の身体が僅かに揺らいで地面に腰を

落とした。

「けっ、つまんねえ」

「あと一発入れたら終わりにしようぜ」

その中で一番体格のいい少年が一步、少女の目の前に立ち塞がる。巷でも有名な悪ガキで、同年代の喧嘩なら負け無しという程の少年だ。

流石に、今まで何らリアクションを見せなかった少女でもこの少年の登場には大きな焦りを隠しきれなかった。

「や、やめて……」

消え入りそうな声で少女は僅かに頭を下げた。

しかし、そんなものは目に入らないとばかりに少年はニヤニヤと含み笑いをして拳を握った。

少女の両手が再び頭頂部に回され、そして少年が拳を振りかぶったときに。

「やめろ」

淡々と、しかしよく通る声がその空間の中に異様なまでに響き渡った。

何事だと、少年達はおるか少女までもがその声の方向に顔を向けていた。そこには漆黒にも近い頭髪を僅かに風に揺らして、ブラウンの瞳はきつく鋭く研ぎ澄まされた、どこか無機質な印象を与える少年の姿がそこにあった。

年は恐らくここにいる少年や少女達と同じくらいであろう。

少し大きめの服装に身を包んだ少年がポケットに手をつ込んだまま、そんな彼らに鋭い視線を向けていた。

「邪魔すんじゃないよ」

そこにいたグループの少年の一人が、その少年の胸倉に掴みかかってくる。

しかし、少年はポーカーフェイスのまま姿を見出すことなく色のな

い声で答える。

「自分より弱いものをいたぶって強くなってるつもりか？ まったく持つて恥ずべき行為だな」

おおよそ、この齡の少年とは思えない言葉でそう言った。

だいたいの意味を理解したのだから少年達はみるみる顔を真っ赤にして標的を少女から少年へと鞍替えした。

「うるせえな。こいつがこんなチヨーシだからいじめられんだろ」

「別にいいじゃないか、弱くても。その弱者を虐げて優越感に浸るお前達よりは幾分かマシだろうよ」

「テムエ、チヨーシのんなよー！」

体格のいいリーダー格の少年がその少年に掴みかかった。

直後、少年は殴りかかってきた少年の拳をいなして背負い投げで地面に叩き付けた。

ここいらではそれなりに喧嘩の強い彼がいとも簡単に飛ばされたこともあり、グループの少年達は表情を引きつらせて一歩後退った。

ここぞとばかりにキツと視線を鋭くして指をボキボキと鳴らす。あまりに直接的な表現ではあったが、少年達の心を揺さぶるには十分すぎる効果だった。

「お、覚えてろ！」

リーダー格の少年を筆頭にそのグループは一目散に逃げ去っていく。それを見送ってから少年はホッと吐息して、背後の蹲る少女を一瞥してからその場を離れようと踵を帰す。

「あ、あの……」

突如、背後から虫の鳴くような声が掛かった。

面倒くさそうな表情をしてから少年は振り返るとそこには伏し目がちになった先程までいじめられていた少女がいた。

少年よりも微かに低いくらいの身長だろうか。

少女はもじもじと両手を弄んでから小さな声で言った。

「ありがとうございます……」

「……あ、そう」

しかし興味なさげに少年はクルリとまた身体の向きをかえる。

「わたし……『5 p b .』っていいます……。あなたは……？」

名を言ってくれ、ということなのだろうか。少年はクイツと首を傾けてから気怠げな声で答えた。

「何だっけ……。あ、そうだ。『テラバ・アイト』だった……」

「テラバ……さん？」

少女、5 p b . は何度もその名前を噛み砕くように繰り返している。それから5 p b . はペコリとお辞儀をしてから口を開いた。

「ありがとうございます……助けてくれて……」

「……助けたつもりはない」

テラはもう顔を向けることなくそう答えた。

顔を上げて5 p b . が驚いた風に僅かに表情を動かして言った。

「なん、で……？」

「目障りだったから排除しただけだ。別にアンタを助けようとしたワケじゃないし」

それだけを冷たく言い放つとテラは早々にその場に5 p b . を残して立ち去っていった。

颯爽と。

*

5 p b . は今日もリーンボックスの街中に繰り出していた。

結局というものの、昨日からあの少年・テラが存在が頭から離れないのだ。

自分を助けたワケじゃない、というのはいったいどういう意味だったのだろうか、と。

言葉の意味としては分かる。それが自分のために行われた行動ということではないということだ。しかし、それ故に幼心で理解できないこともあったのだった。

小首を捻りながら、たまに暇潰しにと立ち寄るホテルのロビーへと

足を向けていた。

豪勢なドアを押し開けて最初に5pb.の意識を引いたのがいつもは客のために流されているミュージックに混じってピアノの音色が流れていることだった。

妙な感覚になりつつも、いつもの特等席である談話席の方へと歩んでいく。

どうもその音色は談話席近くに据え置かれているグランドピアノから発せられていたようで5pb.は何気なくその方向に視線を向けた。

「あ……」

まさしく、それは運命とでも言うのか。

そこには昨日の、しかしどこか違うような雰囲気を放つ少年・テラの姿があったのだ。

思わず5pb.の身体が震えた。

歓喜か、それとも別の何かなのかは彼女には分かりかねるがとにかく昨日しっかりと見えなかったと意識している礼を言いたいと5pb.の足はそちらの方向へと向かっていた。

テラは静かに目を瞑り、ただ自分の打つ鍵盤の感触とそこから流れ落ちる音色に心を委ねていた。

音楽は自分の心を落ち着かせてくれる。

自然と動く己の指を特におかしいとも思わずに、尚のことテラはその音色を放ち続けていた。

そうして数分の時間が流れた後、テラはゆっくりと瞳を開いて小さく吐息した。

鍵盤から指を離し、椅子に手を突いてそつと床に足をつける。

それから視線を前に向けたときに、テラの視界に覚えのない少女の姿があった。

いや、覚えはあった。

確か昨日、このホテルに帰る途中に見つけた苛められていた少女だ。何の因果か、どちらにしても面倒なことに変わりはないかとキラの吐息は次第に嘆息へと変わっていき視線を地面に落とした。

「あ、あの……」

少女が、昨日と変わらない消え入りそうな声でキラにそう呼びかけた。

テラがキツと視線を鋭くさせると5pb.はビクツと身体を大きく揺らして涙目になった。

そのまま視線をふいと動かして自室に戻ろうと足を前に出してから、ボフツと彼の身体が何か大きなものにぶつかった。

顔を押さえながらテラが一步後ろに下がるとそこには屈強で強面の男性がそこに佇んでいた。

「ようテラ。待たせたな」

そう言つて男性はわしわしとテラの頭を半ば乱暴に撫でた。

それに対しても無機質な表情をむき出しにした少年が半眼になって男性を見た。

「今日はもういいの？」

「おいおい……家族なんだし、そんな堅苦しいのはやめないか？」

「別に……」

彼からも目を背けてテラは窓の外を眺めた。

彼の父、ギルバ・アイトはどうやらリンボックスの軍と大事な話をするためにここを訪れていたらしく、その付き添いでテラもここに来ていたようだ。

と、暫くテラのことを見ていたギルバがスツと目線を動かした先には5pb.の姿があった。

それを見てからハアと少し大きめの溜息を吐いてからまたスツとテラを見た。

「おい、テラ。あの娘……」

「何でも」

ギルバはまた大きく溜息を吐いてからゆっくりと5pb.の元にゆ

つくりと歩み寄る。

スツと腰を落として目線を同じくらいにするが、やはりその厳格な表情に5pb.が更に泣きそうな顔になる。

「おっと、驚かせてスマンな。私はギルバ・アイトと言ってあっちにいるテラの父親なんだが、あの子と何かあったのか？」

優しく語りかけるギルバの姿に安心したのか、5pb.がおずおずと口を開く。

「あの……、」

5pb.が経緯を説明するとギルバはガツハツハと大きく笑ってから陽気な表情をテラに向けて言った。

「まったくお前も粹なことをするな！」

「……」

それを横目にテラはうざったそうな表情になる。

それを微笑で見るギルバが再び5pb.の方に視線を向けると少し音量を控えた調子でギルバが言った。

「悪いな……、アイツは少し難しい事情があつてな。だが悪いヤツではないんだ、少し話をしてやってくれ」

ぼんぽんと5pb.の頭を軽く叩いてギルバがそう言った。

それに対して、5pb.が小さく頷く。

それからとてと小さな足取りでテラの元に歩み寄って小さく声を掛ける。

「あの……お話、しませんか……？」

「別に……」

テラがそこまで言つて5pb.に視線を向けるとそこには今にも泣き出してしまいそうな表情をする彼女を見てテラは盛大な溜息を吐いた。

「で、何を話すわけ？」

見るからに面倒くさそうなオーラが全開に放出されているテラではあったのだが、それでもパアツと表情を明るくさせる5pb.を見てテラはもう何も言えなくなってしまったのだった。

＊

それから数日。

テラと5pb. はヒマがあれば会い、そして他愛もない話をしていった。

とは言うものの、話をするのは主に5pb. だけでありテラの方はあまり話をしたがない。

「お前は友達いないのか？」

いつものように話を一方的にしていた5pb. の言葉を遮って放ったテラの言葉がそれだった。

もう少しデリカシーとかがあってもいいんじゃないのか、なんて第三者が居たらそう言われそうであるがテラは特に気にした様子もなく問い掛けた。

ぐさりと心臓部あたりに何か陰鬱としたものが刺さる感覚に陥ってから5pb. は小さく首肯した。

「ふうん……」

「て、テラ君はお友達はいないの？」

やはり力もあつて頼りにもなる。友人の一人や二人や数十人くらいいてもおかしくないと淡い希望を抱いている5pb. がキラキラした瞳でそう問い掛けたがテラはフンと鼻を鳴らしてから答えた。

「いない」

「え……？」

おおよそ、この年の少年らしからぬ答えに5pb. はキョトンとしてしまう。

『いない』ではなく、『いない』とはいったいどういう事だろうかと5pb. は小首を捻った。

「邪魔だし、面倒だし、対応するだけ時間の無駄」

皮肉っぽく、テラは5pb. を見据えてからそう言ったが当の5pb. はよもや自分のことを言われているとは夢にも思わないでなお

もキョトンとした表情になる。

「そ、そんなことないよ。きつとお友達がいたら楽しいと思うよ？」
どうして疑問系？とテラは心の片隅で1%くらいそう思った。

何故、疑問系なのかは5pb.もこの年になるまでお友達が居なかったからである。

「それに、ボクもテラ君と一緒にいたら凄く楽しいし」

「……ああ、そう」

テラは彼女から視線をスツと外して頬杖を突いた。

素っ気ない返事をされて悲しい5pb.が負けじとグイと顔をテラの顔に近づけてから言った。

「テラ君は、楽しい？」

「楽しくない」

間髪入れずにテラはぴしゃりとそう言つてのけた。

ぶう、と可愛らしく頬を膨らませる5pb.にしかしテラはいつもの注意を向けようとせずつに窓の外に移るリーンボックスの緑多き景色を無機質に眺めていた。

そんなやりとりをするものの、ここ数日で二人には目に見えるほどの大きな変化が訪れていたことはどうにも否めなかった。

5pb.は以前までは、極度の人見知りであり人前では上がってしまい言葉を発することも出来ないというのにこうやってテラに軽くあしらわれているもののこうして話を出来るというのはやはり何かしらの変化があったであろう。

そしてテラの方も、今までは一日に精々数回、ギルバと会話を交わす程度が通常であったが、例え5pb.の対応に冷たく当たっているもののこうして他人との会話を放ることはなく、その場でしっかりとした対応を見せるのはこれもまた進歩と言えた。

それから更に数日。

5pb.がいつものようにいそいそとテラの待つホテルの方へと掛けていく途中にその事態は起こる。

曲がり角を曲がったところで5pb.の身体はそこを曲がる少年達と衝突したのだ。

尻もちをついて、暫くしてから顔を上げて少年達の姿を確認したとき5pb.は背筋が凍るような思いを体感した。

「ん……？　おい、5pb.じゃねえか」

「ホントだ。最近見ないと思ったらこんなところにいやがったよ」
先日5pb.を苛めていた少年達のグループだ。

「ひう……」

「やっぱこの反応はおもしれーや。おい、ちょっと苛めようぜ」

「いいな、最近溜まってたんだよな」

グループの中の一人がそう提案すると数人がそうだそうだと色めきだつた。

それと同時に5pb.がビクツと体を震わせた。

「や、やめ……」

「聞こえねえよ！」

グイツとリーダー格の男が拳を振りかぶったところでその少年の身体が宙を舞う。

べしゃつと地面に叩き付けられてその少年がもんどり打って地面を転がる。

「ふえ………？」

5pb.が恐る恐る顔を上げる。

そこには、以前とは違うどこか暖かさを含んだテラが更に他の少年達をのしている姿が目に入ったのだった。

数分、嵐のように暴れ回ったテラを背後に少年達は一目散に駆けていった。

それからスツと踵を帰して5pb.に右手を差し出す。

「大丈夫か？」

「え……　あ、うん」

そつと彼の手を取って5pb.が立ち上がる。
思ったより5pb.の身体が軽かった所為か、彼女がテラの身体に

抱きつく形となってしまう。

「あ……」

その瞬間に、5pb.の頬に朱が射したがテラの位置からでは彼女の異変に気付くことは出来なかった。

スツと背後に視線を向けて忌々しそうにテラは呟く。

「あの野郎共……まだ懲りてなかったのか」

小さく舌打ちしてテラは視線を鋭くさせる。

その間に、まったく微動だにしない5pb.をおかしく思ったのかテラがスツと自分の腕の中に収まる彼女の姿を視界の中に入れてから小さく首を傾げる。

「……どうかしたのか？」

「つく、うう……」

彼女はまた、小さく嗚咽を漏らし始めた。

それにテラは大きく目を剥いて彼女の小さな肩を揺さぶった。

「どうしたんだ？」

まだ何か痛い思いをしているんだろうか、とかもしかして自分が何か知らぬうちにしでかしてしまったのではないだろうかとか。

柄にもなくそんな思考を廻らせながら腕の中に収まる少女を物憂げな瞳でテラはずっと見つめていた。

「俺……何か、悪いことでも……したのか？」

ただ、彼なりにどこか覚えていたのかもしれない。

空っぽの記憶の中に、何も知らない世界の中で存在意義のない自分を感じていた中で唯一臍氣に覚えていた悲しき記憶。

泣き叫ぶ、少女達の声。

それを嫌悪に思う感情はどこかにあったのかもしれない。

「ち、がう……の。助けてく、れたのが……嬉し……くて……!」

目元から幾度と泣くこぼれ落ちる雫を両手で何度も拭いながら、5

pb.はなおも涙を流し続ける。

けれど、それはもう悲しいものではなく自分を必要としてくれた暖かい涙であると言うことを悟っていた。

だから、テラはもう何も言わずにただそこに在り続けた。

「おはよう……」

そんなことがあった翌日。

いつものようにホテルに向かおうと玄関の扉を開けた5pb.を待っていたのは思わぬ客だった。

彼女のことを直視こそしないがテラは一昨日とは打って変わってどこかトゲトゲしたオーラを無くしてそこに立っていた。

そんな状況に驚きを隠せない5pb.が暫くそこで固まっているとテラの方がおずおずと口を開いた。

「親父が……昨日のこと話したら見送りくらいしてやれって言ったから」

「あ、うん。そっか……」

そうだよね……と半ば残念そうに口を開く5pb.の心情など察することの出来ないテラは不思議そうな表情で彼女ののことを見ていた。そんな5pb.とテラはいつもとは少し近い距離を並んで歩いていた。照りつける日光が二人の肌を光らしている。

そんな中で5pb.がふと口を開いた。

「ねえ……どうして昨日は助けてくれたの？」

半ば答えも分かっているという風に5pb.が問い掛けた。

どうせ、また目障りだったからとでも言うんだろうと半ば達観した風に問い掛けたがテラの答えは5pb.の予想を裏切るものだった。

「ヒマだから」

「え……？」

「最近さ、お前が帰った後に妙な手持ちぶさたな感じがするんだ。でも、お前と居るときはそれが無くてさ、だから、お前が来なかったらヒマだから。ホテルの人に聞いてお前の住所聞いて行ってみたらお前がいたんだ」

長らくホテルに顔を出している5pb.はそれなりに係員達とも仲

がよかったのでそれくらいのことなら知っていただろう。

妙に頬が火照るのを感じて5pb.は顔を俯かせた。

「もう、時間も長くないしな……」

どこか寂しそうにテラがそう言った。

「え？」

彼を纏っていた雰囲気が一転したことを妙に感じた5pb.が顔を上げてテラの方を向く。

テラは黙って前を見据えている。やがて沈黙を破って答えを放つ。

「俺、もうすぐプラネテューヌに帰るんだ」

瞬間、5pb.の身体が大きく揺さぶられたような感覚に陥った。

テラの言うことが理解できなくなってしまったのだ。

帰る、とはいったいどういう事だろうか　と。

「俺、親父の付き添いで来てるだけだからさ。親父が帰るんなら俺も帰らないと」

そう言えば、と5pb.は少しばかり唇を開く。

彼と出会った直後、彼が自室へと立った後にギルバから聞かされたことを思い出したのだった。

自分たちは少し厄介な話があってプラネテューヌからリーンボックスに来ていたと。

聞かされた当時は、そんなことは気に留めていなかった。

ただ、友達が出来るということに嬉々として聞き流していただけだったのかもしれないがそれでも今更ながらにその問題が突き刺さっていたのだった。

しかしそうだからと言って自分たちの力でどうなるわけでもない。

5pb.は瞳を伏せて悲しそうな表情を見せる。

「そう、だよ……」

「だから、残された時間は少しでもお前と一緒にいたいと思うから……」

テラは相変わらずの無表情、ではなくどこか嬉しそうに口元をややつり上げてそう言った。

そう言つて5pb.がバツと顔を上げた。
それから微笑を浮かべて彼の横顔を眺めた。

数年後、リーンボックス

街中を徘徊していたテラはふとある一団に視線を向ける。
どうやらストリートミュージシャンらしい。

特にすることらしい事もないのでテラは近くにあつたベンチにどつきりと腰を落として暫しその美しい声に耳を傾けていた。

まるで小鳥のさえずりのようにどこか安心する声。

どこかで聞いたことのあるような懐かしさすら覚えるその声に次第にテラは魅了されていく。

暫くその声に聞き入ってしまったていたテラの肩にトンと軽い衝撃が加わる。

何事だろうと目を開けるとそこには数十分前に買い出しに出向いていた彼のパーティーであるネプテューヌ、コンパ、アイエフの三人の姿があつた。

「何してたのー、テラさん？」

「ん、ちよつとな」

答えを濁しつつ、テラはゆっくりとベンチから腰を上げる。

「大方、あそこのストリートライブの歌でも聴いてたんでしょ？」

意外にも鋭いアイエフがニヤニヤと笑いながら群がる人々の方を指した。

アハハと乾いた笑いを浮かべてテラは後頭部を掻いた。

「でも面白そうですね。少し聞いてみるです」

結構なミィハーであるネプテューヌとコンパの二人が先行してその

人だかりの方へと向かっていく。

お互いに顔を見合わせてテラとアイエフは苦笑したが、仕方なくその二人の後を追ってその場所へと向かっていく。

人だかりの所為で上手く歌手の姿は見えないが恐らくテラ立ちと同年ほどの少女だろう。

その後、何曲かを歌い終わり歓声が一層強まっていく。

『よかったぜー！』

『最高！』

「えへへ、皆さん。今日もボクの歌を聴いてくれてありがとう！」
その後、周囲の観客達は称賛の言葉を少女に投げかけていき、三々五々散っていく。

そんな中で自分たちの帰ろうと踵を歸し掛けたとき、テラの瞳がスツと歌い手である彼女の姿を捉えた。

「5pb……？」

「え？ 何？」

テラの呟きにネプテューヌはキョトンとした表情で問い掛ける。

しかし、テラはそんな彼女の言葉を聞くことなく人々の間を縫って彼女の元へと向かっていく。

「5pb……！」

テラが一層声を張り上げて叫んだ。

彼女の方も呼ばれたことに気付いたのか辺りをキョロキョロと見回して声の出所を探していた。

ようやく人混みを抜けて彼女の前に躍り出ることが出来た。

そんなテラの姿を見たとき、5pb. は口元を押さえて驚愕に表情を染めた。

「テラ……君？」

間違いない。

お互いに記憶に残っている少女と少年の姿だった。

初めて、互いに他人を心から求めた記憶が蘇る。

そんな思いの中、またゲームギョウ界の時は流れて散っていく。

『テラ君ってピアノ上手いよね』

『まーな』

『練習とかしたの？』

『いや、覚えてる頃からもう出来た』

『ええ、凄いね。ボクも音楽とか出来るかなあ？』

『お前ならやれんじゃないの？ “ギター” とかさ……』

幼き頃の、思い出と共に……。

EXTRA・SONG（後書き）

ということでテラの過去編第2回目です。

なんとテラは5pb.ちゃんとまでフラグを立てていたんですね。

拙い文章ですが、呼んでいただいて幸いです。

R o o t : p i x i v A C T . 0 0 - 1 (前書き)

p i x i v に投稿した S i d e G e n e r a t i o n です

少し短いです

異世界『ゲームギョウ界』。

巨大な一つの浮遊大陸の上に4つの大都市を所有する確立された次元の世界。

この大陸は、本来は一つではなく、4つの大陸に分かれていた。

それがなぜ、こうして一つの大陸になっているのかと言えば、それは今から2年ほど前に起きた大陸変動がその始まりであった。

こうして4大陸全てを同時に襲った大地震、それは次第に4つの大陸を引き合わせてやがては一つの巨大な大陸を作り上げた。

大陸が繋がった直後は多くの人々が混乱を喫していたが、それも一週間を過ぎれば収まり、そこから目まぐるしいほどに各大陸　現在には『都市』として機能しているが、ともかく各都市は様々な発展を遂げていった。

技術水準の高い『プラネテューヌ』はラステーションの技術だけでなく、遂にはルウィーの魔法技術までも吸収し、更なる発展を目指した。

発展率の高い『ラステーション』はプラネテューヌの技術を取り込み、独自の方法と貿易で更なる発展を目指していった。

緑多き『リーンボックス』はここ数年で驚くほどに発展を見せ、中世風の町並みはいっからかプラネテューヌを然とした建物が建ち並

び、軍事国家として栄えていった。

雪が覆いし『ルウィー』は変動により様々な気候の見られる地域に変貌したが、魔法文化は衰えを見せず、かつての風習を残しつつ新たな技術を生み出していった。

こうして4大陸、今では4都市は様々な交流を経て、新たな姿へと変わっていった……。

しかし、その中で問題とするべきことも多岐にわたつてある。

各国の交流が始まったことで起きる貿易問題や風習の違いからのいがみ合いや衝突、領土問題、ギルド問題などもある。

人々は日々争い、血で血を洗うような抗争の毎日　人々が出会えばそれだけ争いが生まれていった。

その問題はじきに収まることとなる。

守護女神、各大陸を守護していた女神達の権力もいまだ健在。かつて先代の女神にして世界の終焉を望んだ『マジエコノヌ』を共に打ち破った仲間として互いに手を取り合い、共存していくことを誓った。

しかし、光が照らしたように思えた事態も急変することとなる。かつて永遠の彼方に封じ込めたと思われていたモンスターの再来。たちまち大陸はモンスターに覆われて人々は居住区を奪われていった。

そして、犯罪組織『マジエコンヌ』と呼ばれる謎の組織の出現。違法ディスクと呼ばれる奇妙なアイテムを大陸全土にばらまき、それによりシヨップは枯れ、クリエーターは飢え、あらゆるギョウカイ人が全滅したかに思えた。

無法世界とは縁遠いゲームギョウ界も、マジエコンヌの登場以来、人々のモラルは低下の一途をたどるばかりで、もはや大陸人口の大半はマジエコンヌを崇めつつある。

取り締まるべき政府も何故かスルーしまくりで、とにかくゲームギョウ界は滅茶苦茶に、そこらの民度の低い無法世界になりつつあった。

やがて、力尽きた者は『ギョウカイ墓場』へと送られて、永遠の暗闇をさ迷うことになるのである。

ゲームギョウ界は、再びマジエコンヌの脅威に晒されようとしていた。

これは、大陸が一つに統合され、ようやく一時の平穏を取り戻し

た直後の物語。

ホテルのドアをくぐり、少女はぐぐつと大きく背伸びをした。

照りつける日光に目を細めて、少女はにこやかな笑顔を浮かべ、大きく一人納得するように頷いた。

「ん、いい朝だね」

ヴァイオリンケースを肩に担いで、日光を弾く赤みがかった少しのびてきたショートカットを揺らし、少女はヘッドギアを定位置へと装着する。

軽やかな足取りに、コツコツとブーツの音が響いてスキップをするようなリズムでそれが紡がれていく。

その方向には各大陸を繋ぐ交通手段の一つである『船』が、丁度停泊時間らしく、そこに泊まり込んでいた。

少女は向かう場所を確認するわけでもなく、受付でチケットを購入し、意気揚々と船に乗り込む。

「よいしょつと」

与えられた部屋に荷物を適当に放り込んで、少女は船のロビーにあるカフェの方へと足を向けた。

そこは到着までの時間を潰す人々の姿が見ることができる。最後の一席について少女は適当な飲み物を注文してそれで喉を湿らせる。

少女、ファルコムはしがない冒険家だ。

そうだと自負している。

とは言うものの、実際に旅をしている理由は父から譲り受けた流派、『八葉一刀流』の真髄を習得するための武者修行の旅に追い出されたことも確かだ。

けれど、ファルコムはそんな父を恨んでも憎んでもいなかった。家を追い出された理由は、きつと自分が未熟な使い手であったからだ。だからこそ、自分なりの八葉一刀流を完成させ、そして家族の元へ返るのが己の努めであると。そうした旅路の途中、ファルコムはこの船に乗り込んだ。ゆらゆらと椅子を揺らしながら、流れる景色を心なく眺めて口にくわえたストローをぴこぴこ揺らす。

「お客様」

「はい？」

カフェのウェ이터が恭しくお辞儀をして、ファルコムに声を掛けてきた。

ウェ이터はにこやかにスマイルを浮かべ、何やら話しくそうに声を発する。

「ただいま、店内が非常に混んでおりまして……申し訳ありませんが、相席をして頂いてもよろしいでしょうか？」

「ああ、構いませんよ」

「ありがとうございます」

またもきつちりと育て上げられたような礼をして、ウェ이터はその客を呼びに行ったようだった。

間もなくして、ウェ이터に連れられて一人の青年がファルコムと向き合つて椅子に腰掛けた。

ウェ이터は「ごゆつくり」と声を掛け、もう一度お辞儀をしてその場を去った。

ファルコムはテーブルに肘を突いて、ちゅーっとグラスに残った残りのメロンソーダを啜り、目の前の青年をまじまじと見た。

すっぱりと頭から足先まで、まるで鴉がまとわりついているように真っ黒である。足先まであるようなコートを羽織り、すっぱりと頭部をフードが覆い、その表情を隠していて人相を窺うことができない。

いが、チラチラと見える口元が非常に美しく、まるで女性のようにあった。

何となくそれを覗き込んでしまう。青年はファルコム視線に気付いたらしくスツと顔を俯かせて素顔を拝むことができなかった。

「どうしてそんなに顔を隠してしまっているの？」

ファルコムは何となく、そう問うてしまいたくなった。

青年は驚いた風に口を半開きにして、フードの奥からファルコムを見据えた。

思わずその視線にドキリと心臓が高鳴るのを感じつつ、ファルコムは次に青年が発する言葉を待った。

「隠さなければならぬ者……だからな」

消え入りそうな声で、青年はそう答えた。

ファルコムはふむ……と声を漏らして眉をひそめる。それがどんな意味を持っているのかは彼女には理解しかねるのではあるが。

「誰かから逃げ回っているとか？」

「似たようなものだな」

フツと口元をつり上げて、自嘲するように青年は笑った。

「俺は消えていた方がいい存在……けれど、確かにそこに居なければならぬ存在、だとも言うておくさ」

見た目からして随分とひょうきんな方だとファルコムが少し度肝を抜かれた。

そのやけに格好を付けた物言いも、妙に心を引っ張られてしまう。

そんな力が彼にあるというのだろうか。

「難しいね」

「まあな」

注文したコーヒーに口を付けて青年が言う。

それからファルコムと青年はぽつぽつとではあるが、話を交わす。過去の話、身の上の話 エトセトラだ。

けれど、そんな話をするのはファルコムだけで、青年はやたら話を

したがらない。

特に、彼の過去　　そこまで深い話をしようと言っわけでもない。過去にあったおもしろおかしい事件だとかたったそれだけのことなのではあるが、それさえも青年は話したがらない。まるで逃げているようだった。

それから数十分、

突如、ズズン……と船を大きな衝撃が襲う。窓際の席であることもありすぐに外の様子を確認することはできた。

「……！」

さっきまで晴れ渡っていた空には曇天が掛かり、鋭い雨粒が振り付けていた。

「嵐か……」

青年がポツリとそう漏らした。

それから、バタバタと慌ただしい音と共に船舶員と思われる制服を着た青年が切羽詰まった表情で通り抜けていく。それが見えなくなつてから数分後、船内放送が鳴る。

『お客様に申し上げます！　現在、この船の船底が損傷し、エンジントラブルが起きました！　至急、甲板まで集合してください！

繰り返します……』

ファルコムは眉をひそめた。

こういったことは初めてではない。いや、寧ろ彼女にとっては日常茶飯事でもあったのだ。

どういうわけか、ファルコムは船に乗り込むたびにこの程度の嵐に遭う。どういう理由かはもちろん解らない。ただ単に運が悪いだけかもしれないし、何かに呪われてしまっていたかもしれない。

けれど、そんな経験があるものであり、ファルコムはさして慌てた風もなく青年に向かって声を掛ける。

「とにかく指示に従おう。すぐに甲板に

」

「いや、出ない方がいい」

ファルコムの言葉は青年の声に遮られた。眉をひそめ、ファルコムが口を開く。

「何を言っているのさ、すぐに逃げないと」

「甲板は危険だ。ここにいろ」

青年はスツとファルコムに指示を下す。

何故だかそれに、逆らうことができなかった。ファルコムは深く首肯してバタバタと駆けていく青年の背中を見送った。

*

「はあああああつー!!」

ザン、と青年が手に発生させた黒いオーラのようなものが右手に握られて、雲の海に向かって斬撃が放たれた。

それに渦を巻くように、雲が大きく裂けてボフツと雲が大きくわき上がる。

いや、雲ではなく　大きな魚だ。

白目をした綺麗な翡翠色の鱗を持った船と同じくらいはある巨大魚、恐らくモンスターの類であろう。

そして、青年は数日前に確認していた記憶を探り当てる。

（なるほど……、数ヶ月前から討伐依頼が出ていたモンスターか）
ルウィーのギルドで討伐依頼の張り紙を見て、それと酷似した軀の魚型モンスターである。

楽しむように青年はもう一度、右手にグツと力を込める。

周囲から収束された黒い霧が形を作り、巨大な漆黒の剣となる。

「……!」

太幅の等身が、細く刀のようになり、長さが今の2倍になり楽々魚を斬ることができるまでに伸びる。

青年の蒼い瞳が光り、右手を上段に振る。

すう、とモンスターの肌に一本線の切れこみが走る。数秒後、そこ

から大量の紅い液体が吹き出し、モンスターは悲痛切った声を上げる。

『ギアアアアアアアアアアッ！！！！！！』

「！！」

もう一度、青年が右手を振って完全に断ち切る。

スパツと綺麗に前部分と後ろ部分に分かれ、意志を持たない後ろの部分がビタビタとはね回り、直に動かなくなる　　と思った。

だが、

「！？」

青年は目を剥いた。

バツと後ろ部分が大きく跳ね、そして船に向かって落下しようとしていた。

ダンと空中を蹴って青年がそれを食い止めようと左手を開く。

（間に合え……！！）

左手の平に力が収束する。

それからその力を放とうとしたところで、

「いつ……！！」

モンスターの前部分がなおも意志を持ち、青年に向かって突進を仕掛けてきた。

放とうとしていた黒い球体の軌道が反れる。微かにモンスターにヒツトし、僅かに落下ポイントがずれるが、所詮は気休め程度である。船体が大きく揺れ、そして雲間の中に消えていこうとする。

「ッ！！」

青年は宙に向かって両手を伸ばす。

そこから空間が裂け、先程のような黒い靄をまとった青年の身の丈の1.5倍はありそうな巨大な剣が青年の手に握られた。

「このッ……！！」

ドスッとモンスターの目にあたる位置に剣を突き刺し、暴れ回るモンスターから逃れる。

額にあたる位置を蹴って、剣に黒い霧が集まる。

青年は横薙ぎにそれを放ち、そこから空間を切り裂く斬撃波が飛ぶ。
『グガアアアアアアアアアアッ！！！！！！』

大きく鮮血が吹き出して、モンスターの死体が落下していく。
本来、『消え去るはずのモンスターの死体』が音もなく雲の中に消えていく。

しかし青年はそれに見向きもせず、もう一度、空中を蹴って左手に力を込める。

「間に合わない……ッ！」

船はモンスターと同じく、音もなく落下していく。
ギリと青年が奥歯を噛む。

それからハッと青年がある少女の姿を捉えた。

「ッ……」

先程の少女、ファルコムだった。

「ん……」

ファルコムは目を細めて、照りつける日光に思わず目を細めて、体中がズキズキと痛むことに気付いてふと表情を強張らせた。

それから視界の端から自分を覗き込む人物が居ることに遅れて気付く。

「……起きたか」

ホッと胸をなで下ろす様子で、青年は口元を柔らかくつり上げた。
もう一度、天に向かって視線を送り、意識を失う以前の記憶を探り取る。

確か、船が沈みそうになっていたはずだ。それからこの青年に甲板に出ることを制止され、けれどもやはり心配で、その戦いぶりを眺めていたところでその後から意識がひどく曖昧になっている。

「私は……？」

「生きてる。他の乗客は、助けられなかったがな……」

微笑みかけていた青年の口元がきつく、紡がれた。苦悩するように、後悔するように。

それを見て、ファルコムは何も言えなかった。生きていることに安堵すればいいのか、深く悲しめばよかったのか。何も分からなくなってしまう。

「幸い、リーンボックスの街が近い。あそこなら医療設備も整っていることだろうし、そこまで送る」

青年はファルコムを背負い込み、重たい足取りでリーンボックスの中央市街の方へと足を向ける。

青年の背に乘せられて、ファルコムは悲しそうに眉を下げた。

青年の横顔が自責の色を帯びていた。

「ねえ……君は、誰なの？」

「……どういう意味だ？」

スツと息を吸い込み、ファルコムがまた口を開く。

「君は、他人のことに對して深く思いやる心がある。それは、きっと」

「それ以上は言うな」

青年は静かな口調でそれを制止した。

「そんな大層なものじゃない」

「けど」

「俺は、人の心の『闇』そのものだからな」

ファルコムは絶句してしまう。

悲しそうな横顔をする青年の姿に、ファルコムは、もう何も干渉できる気がしなかった。

数年後、ラステーション

トレインジャックを制圧し、キラとネプギアと別れを告げてファルコムはきゅっと向きを変えて歩んでいこうとする。

「ああ、そうだ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「はい？」

ファルコムの言葉に、ネプギアはこくりと首を傾げた。

「こう……黒いコートをすっぽり被った男の人だけど、見たことない？」

「人捜しですか？」

「そんなところかな」

キラの問いにファルコムは薄く笑んで答えた。

二人はうーんと呻って思考を廻らせるものの、思いあたる節はなく首を横に振った。

小さく「そつか……」と、呟いてファルコムは悲しそうな表情になる。

「ありがと」

「見つかるといいですね」

「そうだね」

キラの言葉にファルコムは笑顔で応えた。

何故だか放っておけなかった。

その寂しそうな横顔が頭から離れなかった。

だからこそ、探し続ける。

自分と、彼を。

だからこそ、まだまだ旅を終えるわけにはいかない。
ファルコムはそう心に深く刻むのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4730v/>

超次元ゲーム ネプテューヌ Side Generation

2011年11月23日16時56分発行